

無限なる神の恩寵

S. S. ナガナンド

『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の第一詩節の中で、著者のアーディ シャンカラは神を悟り、救い（魂の救済）を手に入れるための大変難しい3つの必要条件を挙げています。その1つはマハープルシャ、つまり大いなる実在（神）の仲間になることです。これは、何世にも亘る帰依と祈り、そして最も重要な神の恩寵が結びつくことで手に入れることができます。ですから、大いなる実在の近くにくるといふ機会とチャンスは、それ自体が恩寵の働きです。私は幸運にも、10歳前後のときからこの恩寵にあずかりました。

バガヴァンの我が家への訪問

最初のバガヴァンババのダルシャンの思い出は、1960年代後半のことで、バンガロールのバサヴァナグディの、ある帰依者の家へ両親と一緒にいったときでした。ババは若くて愛らしく、慈悲深く、素晴らしい歌い手でもありました。その家で、女性帰依者たちのグループからマンガラ・アーラティー（献火）お受けになっていたバガヴァンの御姿を思い出します。

弁護士であった、今は亡き私の父、シュリ S.G. スンダラスワームがババ様の帰依者になって以来、私はババ様に近づく沢山の機会を得ました。サイ大学ブリンダーヴァン校が開校されてから2、3年後、1976年にバガヴァンは我が家を訪問してくださいました。ババ様は我が家で一夜を過ごされ、私たちと夕食を共にするという、たとえようもない喜びを与えてくださいました。ババ様は我が家の近親者たちから離れ、弁護士や裁判官を含む大勢の高官の方々と写真をお撮りになりました。その内の一枚で私が大切にしているのは、バガヴァンがソファールにお座りになり、右手の掌を胸に当てておられる写真です。その写真は今、私たちが住んでいるバンガロールの自宅のプージャールーム（礼拝室）に飾ってあります。

2000年の6月2日、バガヴァンは現在の我が家を訪問して祝福してくだ

さいました。家に入ると、ババ様はまっすぐプージャールームに歩いて行かれ、神々の写真を含むすべてを熱心にごらんになりました。

ババ様の注意は1976年のその写真に注がれました。両目が輝き、にっこり微笑まれました。ババ様が何かおっしゃる前に、私はこの写真が、前回ババ様が我が家を訪問されたときに撮られた写真であることを申し上げました。するとババ様はすぐ私に笑顔を向けて、「この家ではありません。古い家— お父さんの家です」と返答されました。そして、その訪問がまるで2、3日前のことであったかのように、そこで過ごされた時間、当時その場にいた人々のことなど、ありありと詳細にわたってお話してくださいました。

家族への豊かな恩寵

その2度のご訪問の間に、私たちは様々な方法でバガヴァンに引き寄せられました。1978年のバガヴァンのご降誕祭には、プラシャーンティ ニラヤムで家族全員がバガヴァンのプールナチャンドラ大講堂のお住まいに招かれ、沢山の贈り物をいただきました。私への贈り物はシルバー（銀製）の指輪でした。しかし、最も価値ある贈り物は、「あなたはヴィッデャールティであり、ヴィシヤールティになってはいけません」という御言葉による祝福でした。これは、あなたの目的は知識の追求であって、物質や快適さの追求であってはなりません、という意味です。その祝福は、ちょうど私が公認会計士の中間試験を受けていた時にやってきました。その御言葉をずっと耳の中で響かせながら、22歳になる前に、私は3つの専門職の学位過程を終了しました。

1981年、弁護士と公認会計士の資格を取った後、私たち一家は、私が選んだムンバイの女性との結婚にスワミの祝福を求めました。スワミはすべての不安を静め、結婚を祝福してくださいました。スワミは父に、スワミが私たち家族の面倒を見るため心配したり不安になったりする理由はないこと、その女性が私たち家族にとって理想的な女性であることを保証してくださいました。それほど神聖な祝福以上に、いったい何を望むことができるでしょうか。

スワミの愛にあふれた恩寵は絶え間なく流れ続けています。スワミの注意から逃れ得るものは何一つありません。私たちの人生の主な出来事で、スワミがその一部でなかったことは一度もありません。

1982年、長女のカマラが生まれた時、複雑な事態があつて妻は大変心を痛めていました。15日も経たない内にババ様は私たちを招いて、その母子（妻

と長女)を祝福してくださり、こうおっしゃいました。

「何も心配することはありません。私がすべての面倒を見ましょう」

妻は健康を回復し、娘は今や二児の母親になるまでに成長しました。それと同じようなやり方で、次女と三女もスワミの祝福を受けて誕生しました。それ以来、スワミは私たち家族をしょっちゅうインタビューに招いてくださいました。

あるとき、スワミは翌週私たち一家全員をインタビューに呼ぶと、前もって教えて下さいました。バガヴァンが事前にそのような示唆をされるのは非常に珍しいことでした。家族は大きな興奮と熱情に包まれました。娘たちはどうやってバガヴァンへの帰依心を表し、バガヴァンを喜ばせることができるか話し合いました。最終的に娘たちはあるプログラムを選びました。

その日がやってきました。スワミのお約束通り、私たちはトライー ブリンダーヴァン (ホワイトフィールドのスワミの住居) でインタビューに呼ばれました。そのインタビューには、私たち家族以外は誰も呼ばれていませんでした。娘たちはバガヴァンのためにデーヴァラナマ (帰依の歌) を歌う許可を求めました。スワミは微笑んで、目を閉じてその歌を聴かれ、娘たちの歌に合わせてお歌いになりました。その歌は、「サダー イェーンナ フリダヤダッリ ヴァーサ マドー シュリハリ (おお主よ、いつも私のハートの中にいてください)」という意味のプーランダーラダーサ・クリティ (聖者プーランダーラダーサの神を讃える歌) で、カマラが選びました。トライー ブリンダーヴァンの敷地全体に、その歌が響き渡りました。この曲の後、妻によるナーラーヤネーヤム (ナーラーヤナ神の物語) の歌唱が続き、カリユガ アヴァターの蓮華の御足にナーラーヤナ神の徳を讃える歌を捧げました。スワミは大変お喜びになり、家族全員に贈り物で祝福してくださいました。

スワミの視線と注目は、決して私たち家族から逸れないように思われました。私たち家族が休暇中にロシア旅行を計画していたとき、スワミは私たちを一連のインタビューに呼ばれ、娘たちに3本の金のチェーン (鎖) を贈ってくださいました。後から気づいたことですが、よく見るとそれらの鎖はそれぞれ長さが違っていました。フルーツも与えて祝福してくださいました。ブリンダーヴァンを去る時、あるセヴァダルが私たちの車の中に箱が一つ置かれていると教えてくれました。ブリンダーヴァンからそのような贈り物を受け取るとは予期

していなかったのですが、箱を開けてみると、中にはインドのお菓子が20キロほど入っていました。今夜これからロシアへ飛ぶというのに、このお菓子をどうしたらよいのだろうと思い、困惑しました。私はそれらのお菓子を一緒に持って行くべきだと直感し、別のスーツケースに詰めて、現地でどうすれば良いかわからないままロシアへ運びました。モスクワの帰依者たちと何度か連絡を取り合った後、遂に、私は自宅のバジャン会に招いてくれたある女性帰依者と接触しました。再び直感で、彼女の家にお菓子を一緒に持って行くべきだと感じました。私がブリンダーヴァンから持ってきたお菓子があることを告げると、彼女たちはぞくぞくして大喜びしました。彼女たちはバガヴァンに、週末に行われる孤児院でのナーラーヤナ セヴァで配布するプラサード（神の祝福を受けた食物）を送ってほしいと、数日前に祈りを捧げたことを教えてくれました。神聖遊戯の主は、帰依者たちを助けるために、どのようにして国や人や時間を超越するのかを示してくださったのです。

ババ様の絶え間ない愛と気遣いは、何年にも亘る数々のエピソードの中に見られます。私たち一家が中国旅行をした時のエピソードです。バガヴァンはブリンダーヴァンのお住まいにおられました。私はババ様に、中国旅行を計画しているけれども、娘の試験があるために妻と一緒に行くのをためらっていると話しました。翌日のダルシヤンの時、ババ様は妻の前で立ち止まれ、娘の試験のことは心配いらない、旅行中はバガヴァンが娘の面倒を見るからおっしゃいました。妻はババ様に、娘の誕生日がその旅行中に重なっていることを申し上げました。ババ様はすぐに、娘の誕生日にはババが祝福を与えるので、その日はブリンダーヴァンにいるよう娘に伝えなさいとおっしゃいました。この保証により、妻は旅行に行くことを了承しました。またババ様はその旅行中、常に私たちと共にいるとおっしゃいました。

旅の終わりに北京にいた時、その日は娘の誕生日だったので、私たちはフレンドシップストアへ買い物に出かけました。店に着くと二階に案内されました。私たちは店の中を歩き回りました。すると向こうから目に飛び込んできたのは、ババ様が刻まれた美しい石の飾り額でした。私はその店でババ様を発見したことに驚き、カウンターに行って、それが売り物であるかどうかを尋ねてみました。販売員にはわからなかったもので、彼の上司に尋ねてみると、その上司は、

「ババはインドに住んでいますが、あなたはババがどういう人物か知ってい

ますか？」と尋ねてきました。

私は代金を払ってその飾り額をホテルの部屋に持ち帰り、妻に「スワミが私たちに贈り物をくださったよ」と教えました。その包みを開いてババ様の額を見せると、妻は大変喜びました。妻は自分の目が信じられないようでした。ババ様は「いつもあなたたちと共にいる」というご自分の御言葉を守られたのです。同じ日、ババ様はブリンダーヴァンで私の娘を呼ばれ、娘を祝福して、あなたの両親は中国で素敵な時間を過ごしています、とおっしゃったそうです。

ババの小さな帰依者

2009年、バガヴァン ババの恩寵により、私たちの孫が生まれることを告げられました。インタビューの間、スワミは私の娘に「イエーヌ サマーチャーラ（何か知らせはありますか？）」とお尋ねになりました。これはだれか（特に新婚の女性）が妊娠した時、年長者が尋ねる典型的な言い方です。私の娘は赤面して否定しました。2、3日後、娘は医師から妊娠を告げられました。スワミはいつも娘の状態を愛情深く尋ねてくださいました。

ヴィジャヤ ダシャミー（ダシャラ祭）の日に、赤ちゃん（孫娘）が生まれました。スワミは私たちの孫娘に関心をお示しになり、孫娘は短期間で素晴らしい帰依者になりました。孫娘はスワミのダルシャンに夢中で、何時間でも座っており、スワミが来られると挨拶をしました。私たちがプラシャーンティ ニラヤムに行くときはいつも一緒について来たので、バガヴァンはあるとき、孫娘と一緒に住んでいるのは私たちなのか、それとも彼女の両親なのか、とお尋ねになりました。私はババ様に、この子はババ様に大変深く帰依しているため、私たちがプッタパーティに行く時は毎回一緒に行くと言い張り、いつもダルシャンを楽しんでいるのです、とお伝えしました。また、孫娘は寝る前にいつもバジャンとスワミのアーラティーを聞きたがることもお話ししました。ババ様もこの2歳に満たない小さな帰依者に応えられ、何度も彼女に話しかけ、輝く瞳で挨拶をされ、彼女のほっぺたに触れて、パーダ ナマスカル（御足への礼拝）をお与えになりました。

ババ様のマハーサマーディ（ご遷化）の後、孫娘はダルシャンに行くことを主張しました。孫娘はババ様の御体が収められた棺の周りを歩き、サシュタンガ ナマスカル（八体投地の礼拝）をしてから、「じゃあね、ババ」と言い、ちょうど彼女がいつもダルシャン後にしていたのと同じようにご挨拶しました。

それから数日後、孫娘は私たちに教えてくれました。ババは疲れて、喉が渇いて休んでいるけれど、また戻ってくる。そうババが話してくれたよ…と。ババ様はこのように、彼を愛する小さな帰依者とつながり、報いてくださるので

スワミの信託（トラスト）における義務

忙しい職業人としての生活、家庭における責任、そしてバンガロール近くのソンドコッパにある我が家のファミリーテンプル（菩提寺）、シュリ チャンナケーシャヴァースワミ寺院の献身活動に参加しながら、なぜスワミはこれほど多忙な生活の中で、私がスワミの信託（トラスト）の責務を果たせるようにしてくださるのだろうかと思ひます。

2000年、バンガロールでスーパー・スペシャリティー・ホスピタル（高度専門病院）が建設中だった時、そのプロジェクトの進捗状況を見に来るようバガヴァンが私に指示されたことを思い出します。訪問後、翌日に家族全員がバガヴァンのインタビューに呼ばれました。スワミはその仕事の進展を大変喜ばれましたが、私はそのプロジェクトに幾つか許可が必要であることを申し上げました。

突然、スワミは私にシュリ・サティヤ・サイ・メディカル・トラスト（医療信託）の理事になってほしいとおっしゃいました。私は大変動揺し、ショックを隠すことができませんでした。私はスワミの両手を私の両手の中に取り、自分がとても若いこと、医療分野での経験がないこと、数年前に父を亡くし、家庭と仕事の責任が沢山あることを申し上げました。私は免除され、どなたか他の年長の帰依者の方にその仕事が任されることを祈りました。スワミは折れませんでした。私はただそこにいるだけで良い、スワミがすべてを行うからと約束してくださいました。私はスワミの蓮華の御足に触れ、スワミだけが私にその任務を遂行する強さを与えてくださるでしょう、と言いながら、その新しい役職で私を祝福してくださるように祈り、スワミのご意志に委ねました。

その御言葉の通り、私と交流する時はいつも、スワミはこのことを心に留めておられました。あの頃、スワミはプラシャーンティ ニラヤムで午前6時40分にダルシャンを授けていらっしゃいました。私はいつも午前3時にバンガロールの自宅を出発し、ダルシャンの時間に間に合うように到着したものでした。

妻も相変わらず私と一緒に来ていました。何かご報告しなければならないことがあったり、何らかの問題についてスワミのご指示やお導きを得なくてはならなかったりすると、スワミは私の近くに来られ、「3時ですよ」とひそかに囁かれたものでした。最初にインタビュールームに招かれたのは私自身でした。

スワミは数分間、公務について耳を傾けられ、一時間以上を靈性、家庭生活、子供、教育、そして私の妻の靈的探究における助言に費やされました。インタビューの最後に私の旅程をお尋ねになり、私がババ様のお許しを得て出発したいと申し上げると、いつも惜しみない祝福をお与え下さり、またすぐに戻って来るようにとおっしゃったものでした。ババ様は常に私の様々な責務をご存知であり、わざわざ便宜を図って私をババ様のご使命の一部にして下さっていたので、私が待たなければならなかったことは一度もありませんでした。

私たちの心は、バガヴァン ババの思い出に満たされています。私たちはババ様の御姿を恋しく思います。私たちはババ様の元へ即座に駆けつけ、すべての問題をババ様の御前に差し出したものでした。ババ様は私たちに無限の愛を降り注いでくださいました。ババ様は私たちが困難な状況にある時、不屈の精神と強さを与えてくださり、喜びを約束し、祝福を降り注いでくださいました。4世代からなる私の家族全員が、バガヴァン ババとのユニークな関係を持っていました。ババ様が私たちの人生に入って来られたのは確かに大変幸運なことであり、充実感を与えてくれました。ババ様は私たちが為す一切のこと、あらゆる時、すべての呼吸の、本質的に不可欠な部分なのです。ババ様は五感では知覚できない御姿で、私たちと共にあって導き続けておられます。スワミのお約束は私たちと共にあり、彼の肉体の有無によって左右されるものではありません。スワミは常に私たちと共におられ、絶えず私たちの人生に触れながら、いつもそこにいらっしゃることを思い出させてくださるのです。

(この記事の著者、弁護士シュリ S. S. ナガナンド氏はシュリ・サティヤ・サイ・セントラル・トラスト〔中央信託〕の理事)

出典：月刊『サナータナ・サーラティ』2012年11月号より